

書評

地学教育講座第2巻

鉱物(須藤俊男監修),
地形と土壌(多田文男監修)
海洋と陸水(三野与吉監修)
福村書店刊各150円 55年9月

全15冊地学教育講座の第2回目として表記の3冊が配本された。地学の特長は自然界をそのままの姿で直接観察し、これによって得た事実を科学的に理解しようとする点にある。この点で現象を分析抽象して取扱う物理や化学と大へんちがった性格をもったものである。自然の複雑な構成や発展は単に基礎となる物理化学の知識だけから演繹的に導くことはできないのである。だから自然の正しい理解のためには地学という分野が当然重視されなくてはならないので、この意味から類書の少い地学教育講座の刊行は誠に有意義のことと思う。生徒と教師と専門家が一体となって作成することを標榜しているが、今回もこの点は十分行きとどいて立派な出来はえだと思ふ。そして単に読む本ではなく、自然から学ぶためのハンド・ブックになっていて、実験や観察のためには特に深い注意がはらわれている。今回配本になった3冊を通覧して気のついたことは海洋にあてられた頁数が異常に少いことで、天文に関連したもので3冊もしめられているなら海洋資源にめぐまれた日本としては海洋はせめて1冊分はほしい。それから海洋の部分の内容が確かに興味はあるが、教育用としては少しかたよってないだろうか。(根本順吉)

気候と人間 文庫クセジュ
120頁
エミール・デュオ 120円
奥田穰, 岡本雅典
神山恵三共訳

たしか一昨年だったと思うが、Que sais-je? 文庫の新刊リストの中に Emile Duhot の《Les climats et l'organisme humain》というのがあり、早速購入して読んだ

が、そのとき、この本は是非とも日本にも紹介したいものだと思った。その後、日本版の出版元、白水社の話ではすでに翻訳の計画があるとのことで、大いに期待していたところこのたび、気象研究所の奥田穰、岡本雅典、神山恵三の3氏の共訳で、《気候と人間》と題して刊行されたが、この方面に深い関心をもつ私にとっては誠に嬉しいことである。気候と人間の関係は極めて複雑なもので、それぞれの分野でいろいろと研究されているが、気候と人間の健康ないしは疾病との関係は医学・衛生学の領域では重大問題であり、また、わが国のように複雑な気候の所ではもっともっと研究すべきであるにかかわらず、その研究は比較的たちおくれしており、最近、医学者と気象学者の協力により総合的研究が緒についたばかりといっても過言ではないのであるが、ここに小冊子ながら、きわめて学問的にも価値のあるこの書が紹介されたことは、今までこの方面の参考書として利用されていたのがわずかに de Rudder の著書位であっただけに、今後、この方面の研究の発達に寄与するところ大なるものがある。

内容は気候要素、気候因子、気候の害(主として気候に基く健康障碍)気候の恩恵(種々の治療法に及ぶ)の4部に分かれ、著者の専門である医学的事項はもちろん気象学、地理学的事項についても正確に記載し、また気象精神病理学の項では哲学者や小説家の著作中から関係事項をいろいろ引用し、日本の学者ではほとんど考えられないような該博な教養を示しているのは興味深いことである。

訳文もおおむね適切と考えられるが、医学用語ないしは医学的表現については、専門外の読者にはわかりにくい所があちこちにあるようだ。これは原語を忠実に訳したためと考えられるが、たとえばコッホの桿菌という代りに結核菌、レプトスピラ

病(福田氏病)という代りにワイル氏病とした方が日本人には却ってわかり易いであろう。おそらくはこのような文庫ものの出版に際しては、なるべく早く翻訳して発刊するという営業面の制約から推敲を充分にする時間的余剰がなかったのだらうと想像するが、機会があったら改めてほしいものである。

しかし、これを補って余りあるものは訳者の註であって、日本の気象図と相まって、読者を益するところ大なるものがある。原著で気候を扱う場合、どうしてもヨーロッパ、特にフランスが重大視されているだけに、日本ではどうなのかを知りたくなるのは当然で、訳者達はこの問題について充分に答えてくれており、その親切な労苦に対しては大いに敬意を表する次第である。

なお読書の体裁であるが、この文庫では科学的内容のものでも横組のものが極めて少いのはどうかと思う。本書なども縦組にせず、横組にすればよほど読みやすくなるのではなからうか。妄評多謝 北 博正 (東京医科歯科大学医学部衛生学教室)

気象電気学

畠山久尙・川野実著
岩波全書 1955年 6月
215頁・250円 岩波書店

空中電気学全般を概説するテキストブックとしては、英文ではジョンランドのもの、チャルマースのもの等まとまった好著があるが、邦語で書かれた単行本は今までになかったので、本書の出現はそれだけでも大きい意義をもつ。しかも内容は、大気イオンと大気伝導度、空中電場、雷の電気、及び大気中を流れる電流と、従来の空中電気学の各項目にわたり、最近の重要な原論文をことごとく読破し、新たな構想の下にこれを取り上げて、最新の研究成果の趨勢を知らせてくれる。引用する論文だけでも223の多くに及び、その労作の程度が伺われるが、単に多くの

高木 健君の逝去を悼む

高木健君は明治11年新潟に生れ中学卒業後氣象事業に従事されたのは明治30年10月、明治34年第2回氣象練習会に大阪測候所雇として受講、同年11月練習を了えて大阪に帰任、日露戦役起るや明治37年3月中央氣象台に臨時観測所を置く官制發布され臨時観測技手となり第2(木浦)在勤となり砲煙弾雨の中に観測陣營に奮闘された。明治40年3月帰朝、氣象台技手となり南京に勤務されたが同年6月金沢測候所技手となり所長勤続8年職務に尽瘁された。大正3年8月測候技師となり石巻測候所長として勤務された。その頃石巻は宮城県唯一の測候所で東北測候所の首位を占め、岩手県唯一の宮古測候所は海路必ず通過の要港で、故福井規矩三君と故三木村三郎君は親交あり、健君は小柄であったが拳止敏勝で友交に汚点がなかった。酒量拮かにして両君は良い飲友達であった。

同じ練習会時代からの友人として多くはなき人の数に限り八太益次郎君と山川軍治君が隠退して健在である。大正12年3月に辞任されて中央氣象台囑託となり大正12年9月関東大震災起り横浜測候所長朝倉慶吉君震死の跡を追うて12月測候技師所長となり震災調査に尽力し企画の神奈川県氣象年報4篇を刊行し氣象統計の外、生物景象、地震、上層気流観測の分冊を完成した。足尾測候所長で文筆を以て鳴った故横田八百吉君は君の義兄であった。

昭和14年10月辞任、その後中央氣象台囑託として各地の氣象統計調査に当られておったが、昭和16年3月8日退職された。その後令息と共に居住を移され近年は長崎県大村市諏訪町53番地に居住し雨量通報所の事務にあたり老後の生活を楽んでおられたが9月14日78才の高令で逝去された旨未亡人よそ子さんから通知があった。多年氣象事業に尽瘁された功績は亡すべからざるものが多かった。弟に陸男君あり、支那通でソオソオたる実業家である。また君の次男健夫君は読売新聞社編集局長として日々健筆を振っておられる。

不肖等その訃音を伝承し謹んでその生涯の一片をつづり、その冥福を祈る。

(佐藤順一)

氣象学講座の第1回配本をみると、その各章は立派な研究ではあるが、これを集めただけでは、氣象学講座の“氣候変動論”とはいえぬのではないかと感の深い。“数値予報論”にはこのような欠点は認められないが、これには含まれている広告によると、“氣象測器”にはわれわれに最も関係の深い地上測器のことは書いてなくて、どうも同じ著者の名著“地上氣象器械”の補遺のような内容が報ぜられている。そうであるとすれば“講座”という名に惑わされたわれわれは全く浮ばれないわけである。今後は出版社、編集委員著者は“講座”というものの性格を認識し、読者は“講座”に何を期待しているかをよく考えて、これにこたえるように仕事をしてもらいたい。(AM)

「故伏木測候所長大森虎之助君
ましのびて」について訂正

本誌2巻7号に掲載された表記の論文について、田口克敏、竜雄の両氏から誤りを指摘訂正かた申入れがあった旨、編集部から私に連絡があったので、事実を確認の上、つぎのように謹んで訂正する。

1. 大正10年9月26日台風来襲による最大風速は19.4m(26.8mは誤り)で、当時の風速を現在のものに換算(0.7倍)すると13.6mなり、風速としては、そう強いとは言えない。なお、原簿中の記事からみると暴風は0320時から0830時までで、0200時の風は非常に弱い。急に南の突風を伴って暴風が吹走したので、不用意の所に大災害が起こったのではないと思われるが、それにしても被害が大きすぎる。病氣静養のために伏木に帰郷されていた田口克敏氏の記憶にも、時々家をゆるがし、瓦を吹き落とすような強さのものもあったとしているし、観測値そのものにも疑問が生じて来る。

2. 大森虎之助氏の最後は魚津湾頭に投身自殺と述べたが、自宅後庭で服毒自殺と訂正する。

3. 漁船沈没数1,250艘は250艘、彼是葬祭は月余に云々の中の悲戯は悲劇と訂正する(植字誤)

(佐藤順一)

論文を参照したというに止らず、欧米の諸大学の論文から、我が国の研究者の手になるオリジナルな業績まで、その選択は著者の広い見識がおのずと現われ、この方面の研究に従事する人達には、非常に便利なハンドブックの役割を果してくれる。わが国の氣象電気研究の開拓と推進にあたって来た両氏にして始めてよくなし得る処であろう。

なお本書では新しい試みとして第2次世界戦争後新たに発達した電波氣象の項目についても、基礎的なところから全体を要領よく説明している。もちろん他の項目においても基礎的な理論や測定法等から説明してあるから教科書として適当なことはいうまでもない。

本書の序で著者も強調しているように、最近の空中電気学は、ほとんど氣象学の一分野ともいうべきもので氣象電気学と呼ぶのにふさわしく今後の発展も氣象学の他部門の発達と密切に結びついている。この意味で本書は氣象学にたずさわる多くの人々に読まれることが望ましい。ただ本書によって始めて氣象電気学の概念を得ようとする読者にとっては、あまりに多くもった内容がかえって全体の概括を困難にするおそれがなくもない。しかし元來氣象電気学ほどの部分をとっても、初等的な電気学の知識があれば、理解するのにさして困難なものではない。本書の第1章では氣象電気研究の歴史と概観という題で、全体を歴史的にたくみにまとめているから、この章とあとは自己の興味のおもむく章を精読するというのも本書の読み方の一つであろう。(北川信一郎)

講座とは何か

氣象学界では昨年は大御所が同時に“辞典”と“事典”を監修し、多数の学者がこの両書の共通の執筆者となって話題となったが、今年もまた、またかという不満とも憤りともつかぬ声が聞かれるようになった。